『江戸の大地震対策』その安全・安心まちづくり

講談師 一龍斎貞花

よう。

・
大地震とその対策を振り返ってみ

・
大地震とその対策を振り返ってみ

・
大を経過したが、復興未だし。江戸

・
東日本大震災からすでに三年半以

江戸開府以来、一六○三年から二○一四年までの四一一年間に、単純計算で震度5以上の地震が五○年に一度、但し近年は頻発している。江戸を中心に大きな被害を受けたのが、元禄一六年(一七○三)十一月二十二日。安政元年(一八五四)十一月四日・五日。安政二年(一八五五)十月二日。安政元年(一八五五)十月二日。安政元年(一八五五)十月二日。安政元年(一八五五)十月二日。安政元年(一八五五)十月二日。安政元年(一八五五)十月二日。安政元年(一八五五)十月二日。安政元年(一八五四)十二日。安政元年(一八五四)十二日。

どうやって察知したのか、予告の

害は、江戸を含む武蔵・相模・上総・「元禄の大地震」 元禄の地震の被

てはならない。

質的な物を送り、ぜいたく品を送っ

□三三人と記録されています。 屋の全半壊二○、一六二戸、死者五, の屋敷、神社仏閣、町家の多くが倒 安房・小田原。江戸城・大名、旗本

うに」と予告。
地震があります。お騒ぎにならぬよ地震があります。お騒ぎにならぬよ

根拠は分かっていない。まさかなまずが暴れたのを見たのではなかろう。武士の最高の学問は、天文・数学。び江戸時代、ことに火事が多かっただけに天文方を置いて安全対策をとっていた。

休暇を与える。一、家が倒壊、焼失した者には特別一、家が倒壊、焼失した者には特別

二、借金を年賦で返済している場合、今年度分は延納を認める。今年度分は延納を認める。今年度分すでに返済した者には、その分を返すから自分の家の復興に役立てよ。三、地震後の需要から、諸物の値上げを許さない。とくに材木、職人のげを許さない。とくに材木、職人のはを許さない。とくに材木、職人のはない。といいる場合、

五、被災者への見舞いは、必要、実は時機を見て行う。四、復興工事は簡素に行うこと。江

十、江戸市民の飲料水源の、玉川上 大、社会不安を与えるような、デマ を流した者は厳罰に処する。 工、義捐金を大いに歓迎、拠出者は 顕賞する。 九、死者の埋葬は特例を出す。 十、江戸市民の飲料水源の、玉川上

貸し与える。十二、家の破損・焼失の復興資金を十一、罹災者には、救米を行う。

と。

水の樋など破損の修理を急ぎ行うこ

くいわれるが、第一に市民のためには出来ない」というお役所仕事がよけです。危機対策条例、復興対策条

邪魔をしたり、本職に任かせればい じです。官民一体協力。社内も全員 詳しいんだ」と、しゃしゃり出て来 ない名だけの担当大臣が、「オレは なにをしたらよいか。専門的知識 される方もいらっしゃると思います。 るだけじゃなく、間違いを引き起し いものを口出しして、結果的に遅れ て勝手なことを命令したり、業務の なければいけないかです。 た例がいくつもありました。思い出 致協力して対応し、まずナニをし これは国だけでなく、企業内も同

「迅速な行動で復職した加藤清正」

門を守る者とてなし。この時清正は け、表へ出でなば瓦に打たれぬよう のお城へ駆けつける。火元に気をつ 吉)のお身の上が心配。すぐに伏見 禄五年七月十二日)、 近畿地方を襲 慶長の大地震(正しくは改元前の文 に用心致せ、続けーっ」と韋駄天走 った地震。この時、加藤清正「殿下(秀 元禄地震の一〇七年前 (一五九六)、 塀は崩れ門は傾き、大切な大手 駆けつけみれば堅固な新築の城

> 芝居でおなじみ「地震加藤」、 清正といわれる由縁の一つ。 つけ禁慎を許されるという、講談・ が主君の安否を心配して一番に駆け とあつれきを生じ、禁慎中であった をしたと、石田三成、 朝鮮の戦に出陣中、勝手な振る舞 小西行長ら 忠臣

出たのでしょう。 見城内の死者だけで六百人といいま すから、全体でどれくらいの死者が 大仏が崩れ、余震は一カ月続き、伏 伏見城の天守閣、石垣、方広寺の

んね。 う。清正のようなわけにはいきませ していたら救助、救援は遅れてしま ても、職員が役所から遠い所に居住 ますか。道路が寸断されていたら無 と、会社や社長の家へ駆けつけられ それにしても、大地震に、ソレッ 役所で毛布や食料を備蓄してい

貞観津波の記録

山に登るも及び難くして、溺れ死ぬ て海となり、船に乗るいとまあらず (八六九)の惨状 平安時代の貞観地震による津波 「原野も道路も総

> の津波で運ばれた砂が、 現在の宮城

> > 回にお伝えします。

津波と同じです。 る由。東日本大震災の たという地質調査があ

後、 津波到達地点に、「こ 禄地震からわずか四年 にしたいものです。元 であるか、歴史を大切 策 まいますが、防災対 ど元過ぎれば忘れてし さと申せましょう。の ふまえた教しえの大切 がないという。歴史を にも家を流されたこと りそれ以降幾度の津波 立て、村人はこれを守 べからず」という碑を こより下に家を建てる の家を流された村では この貞観津波で多く 対応がいかに大切 すみやかな被害処 宝永の大地震は次

港に深く入り込んでい 県石巻市から、福島県浪江町まで内 者千ばかり…」(日本三代実録) こ

